第七章　美の悟り

第七章　美の悟り

我々が歓びを感じないものは我々の心に重荷となり、我々は如何に言ってもこれを逃れんとするものであるか、或は効用が失せるに一旦なって荷厄介になるが、有用なる故に一時的に、又部分的に我々と関係あるものであるか、若しくは、一寸我々の目に止まるがやがて過ぎ去って浪費の如きものかである。

この世界の大部分は我々にとって無價値なものなるかの如くである。然し我々はそのままにして置くことは出来ない。かくては、我々は自身の自我が小さくなるからである。我々には完全世界が与へられてゐる。我々は、已の世襲財産は已が力の凡てによって入手し得る、との信念を持つことが我々の力の凡ての最高の意義である。

然し意識の拡張の過程に於て、美感は如何なる本分を持つか。美感は眞理を明暗に分離し

、又非妥協的に美醜に区別して見せるものであるか。若しさうならば、美感は宇宙に絶望を醸し、一切の個物から万物へ通ずる交通の大道を遮ぎる障壁を築くことになるのを我々は承認しなければならないだらう。

然しこれは眞実であり得ない。我々の明察が不完全な限りは、既知物と未知物、快物と不快物との区分は必然的に存する。然し幾人かの哲人達の定義にも拘らず、人百はその可知世界に対し何か恣意的、絶対的な限界を

置くことを承認しないものである。日と科学は、嘗ては人百の区画に未踏査又は不可踏査と記されし領域へとナリ込みつゝある。我々の美感も同様にその征服地を拡大し進めることに専念しつゝある。眞理は到る處にある、故に凡ての物は我々の知識の対象となる。美は普遍的のものである。故に凡ての物は我々に歓びを与へる能力が有る。

人数の丁史の初期に於ては、人百は万物を生命の現象として眺めた。生命の神秘は生物

と無生物との間に明確な区別をたてることより始った。然し科学が生物と無生物との境界線を押し進めれば進める程、愈々それは漠然たるものとなり一つである。我々の理解力の初期に於ては対照の此岸の明確な線は調子ではあるが、理解が愈々明かになるにつれて次第に消えて行くのである。

優婆尼沙土に曰く「万物は無限の歡喜によって創造され、維持されるのだ」と。創造のこの原理を了解するためには、我々は先づ分離、美なるものと非美なるものとの分離から始めねばならぬ。そこで美の理解力は来って我々の意識に一撃を加へ以て我々を原始的昏睡から呼び醒さねばならない。そして対照の督促により目的を達するのである。それ故に我々の最初の美との面識は綺や羽飾りやで、否、不恰好さで我々を感動させる雑色の服装をした美とである。然し馴染が深くなる時、明かに不協音であったものが、節奏ある協音になるのである。先づ我々は美を周囲のものか

ら分離する。我々は美を爾余のものから離して見る。然し絶に万物と美との調和を了解する。その時、美の音楽はもはや騒音で我々の心をかきたてる要はない。美の音楽は凶暴を放棄し、柔和なるものは悦を開かんと[176]の眞理を以て我々の心を慈さ附ける。

我々の成長の或段階に於ては、我々の歴史の或時期に於ては、我々は美の特別の宗派を開き、そして大数の選ばれた者の誇りの種とすべく狭い仲間に削減せんと試みる。[177]をうすると丁度高尚な眞理の理解が見捨てられ、迷信が発生して阻止し難くなった印度文明の衰微時代の婆羅門[178]の例の如く、信者の中に気取りと誇張とが生ずるのである。

美学の歴史にも解放の時代が来る。その時代には大小事物の中に美を認識することが容易となり、又奇妙さの点で驚くべきものより凡、普通の物の気取らぬ調和の中に美を認識するのである。そんな具合故、我々は反動の段階を経ねばならない。即ち美の表現に際し

て明かに快的な凡ての物、習慣の裁可によって王冠をかぶらされた凡ての物を我々は避けやうと試みるのである。そこで我々は反動的に、平凡な事物の平凡さを過大視する誘惑に陥入り、それを無理にも非凡にするのである。調和を恢復するために却って我々は全反動の特徴たる不調和を創造する。我々は既に現代に於てこの美的反動の徴候を見る。それは人百の美意識の分野を醜と美とにはつきり分つものは知覚の狭小さに過ぎぬと云ふことを人百は終に知る様にならねばならぬと実証するのである。人百が私利を離れ、諸感覚の張い貪慾な要求を離れて物を見る力を持つ時、その時にのみ到る處に在る美を眞に観察するのである。その時にのみ人百は我々にとり不快なものは決しも非美ならずして、その美を眞理の中に持てるのを知る。

我々が虚偽と云ふ如きものは存しないと云へば馬鹿げたことだらうと同様に、美は到る處に在りと云ふは、醜なる僞は我々の思惑か

ら抹殺さるべきだと云ふ意味ではない。虚偽は宇宙の組織の中にでなくて、我々の理解力の中に否定的要素として確かに存する。同様に眞理の不完全なる了解から来る美の歪曲された表現の形をとって我々の生活や芸術の中に醜が存在する。或程度迄、我々は我々の中や万物の中に在る眞理の法則に背いて生活を営み得るし、同様に到る處に在る調和の永久の法則に背いて醜を生ぜしめ得る。

我々は眞理感を通じて創造の中に法あるを了解し、美感を通じて宇宙に調和あるを了解する。我々が自然界の法を知る時、物質的力に対する支配を拡げ、力強くなる。我々が自己の道徳的本性に在る法を知る時、我々は自我を支配し得て自由になる。同様に我々が物質界に存する調和を了解すればするだけ、我々の生活は創造の歓びとなり、芸術に於る美の表現は一層眞実に普遍的となる。我々が自己の霊に在る調和を意識する程になるにつれ、宇宙霊の至上の歓喜の理解は一般的となり、

我々の生活に於る美の表現は善と悪との狀態で無限者に向つて動いて行く。「美は眞、眞は美し」(199)と云ふことは我々は常に知つてゐなければならぬ、と云ふのが我々の存在の最高の目的である。我々は全宇宙が悉に浸入することを了解しなければならぬ。何故かならば、盡は全宇宙を生み、維持し、その胸へ迄帰るからだ。(199)

我々は自分に事物の最奥の中心に立つ力を与へ、蓮羅吸摩(ブラフマ)のなる無私無慾の歡喜の充実の試味を有する心の完全な解脱を有たねばならない。

音樂は芸術の最も純粋な形である。それ故に美の最も直接な表現である。それは一であり、単純な形と精神とを持ち、しかも無縁な何等かの物につゆ煩はされない。我々は創造の有限な形象に宿る無限なるものの示現は、静かで、目に見える音樂そのものであると感ずる故である。星の燦らめく星座を飾ること なく繰返す夕の空は、初めて聲を立て、我々らをの神秘に驚いて心打たれ、繰返し、繰返し

同じ言葉を一おやゆび、絶えず長人で聽ける
る子供の様である。七月の雨の夜、暗黒が牧
場に重く垂れ、軒打つ雨がまどろめる大地の
靜けさ一面に蔽ひを幾重にもおひかぶせる時
、雨雫の音調は音そのものの暗さの様に思は
れる。薄暗い並木の陰欝、薄汚く濡れた髮を
して漂ふてゐる泳者の頸の様に、ヒースの枯
れた荒地に散在してゐる刺々き灌木、じめじ
めした草や濕土の香ひ、村小屋の囲りに集へ
る漠然たる黒い塊りの上に立つ寺院の尖塔、
これら凡てのものは夜の心から生じ、空を満
たす雨の音と一にな一て消え失せる調子の様
に見えるのである。

それ故に予言者たる眞の詩人は、音樂によ
って宇宙を表現せんと努める。

眞の詩人は形象の発現や蒼穹の畫布の上を
凡ゆる瞬刻に過ぎ去って行く涯てしなき線と
色との混合やを表現するに繪畫の表象を殆ど
用ひない。

詩人は詩人なりに理由を持つ。何故かなら

ば、絵を描く人は畫布や畫筆や絵具箱を持たねばならぬからである。畫家の最初の一筆は完全な理想からなることと甚だ遠い。そして畫が出来上り、畫家が去る時、孤独となった絵は独立し、創造の手の壹の止なき接觸は引込められる。

然し歌ひ手は自分の裡に凡ての物を持ってゐる。音譜は彼の生命そのものから発する。音譜は外で集められたものではない。彼の思想と表現とは兄妹の関係に在る。双生子として生れることも屢々だ。音樂に於て心は印刻に顕現する。無縁物の如何なる障壁にも邪魔されない。

それ故に音樂も他の芸術の様にその完成を待たねばならぬが、一歩一歩に於て全体の美を発表する。言葉と雖も、表現の道具としては障壁である。何故かならば、その意味は思想によって解釈されねばならないからだ。然し音樂は何か明かな意味に頼るの要がない。それは如何なる言葉も言って表はし得ぬも

のを表現する。

更に音樂と音樂家とは不可分なものである。歌ひ手が去ると歌は共に消え去る。歌は歌ひ手の生命と歓びとを永久に投入してゐる。

この宇宙の歌は一瞬たりとも、決してその歌ひ手から分たれない。それは彼等の外部を流れる物によつては形造られない。決して終りと云ふことのない形をとる、歌ひ手の歓喜をのせたものである。それは空一面にその脈搏の顫音を送る偉大な心なのである。

不完成なものの中に於る完成の示現である

この音樂の一々の節には完全さがある。その調子は一つとして決定的ならざるものはなく、しかも各々は無限なるものを反映する。

この偉大な調和の正確な意味を得損ねたら一体どうであらう。それは絃に觸れ、彈けば直ちにその音色の凡てを引き出す手の如くならずや。それは宇宙の心から出て真直ぐに我々の心に来たる美の言葉、表徴である。

昨夜、暗黒をおほへる沈黙の中に私は独り

立ち、永久の旋律の歌ひ手の聲を聽いた。私は床に就いて、心の中にこんな考へを抱いて眼を閉ぢた。即ち、まどろめる百、よし私は無意識に近さうとも、生命の踊りは星と歩を合せ一つ私の眼ふる肉体の靜かなる活舞台でなほも續けられやう。心臓は鼓動し、血は血管中を躍動し續け、私の肉体の幾百万となき生ける原子は彈き手の接觸に震へる竪琴の調子に一ふして振動するであらう。